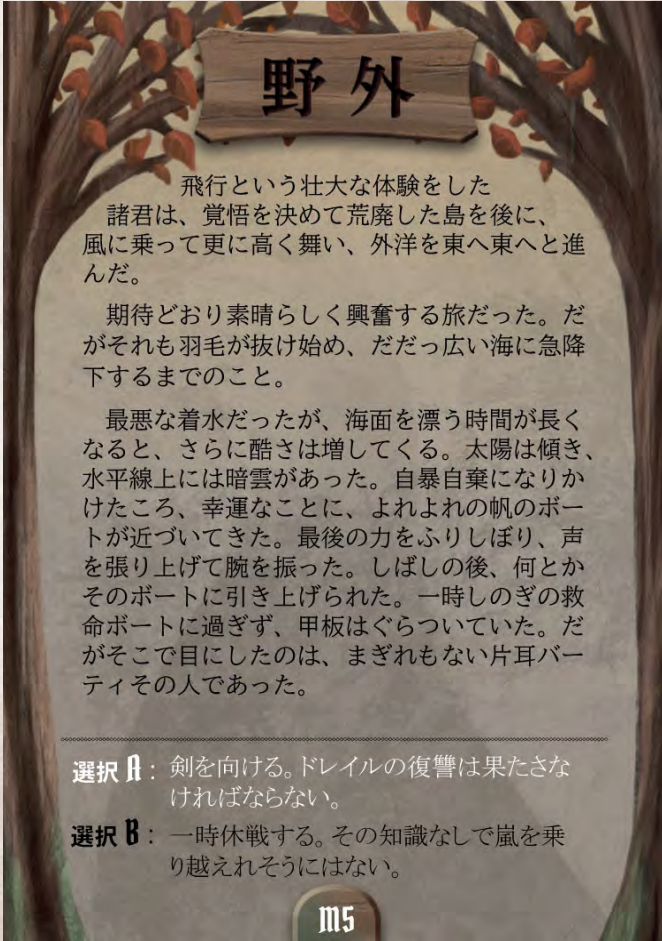


どこに向かって飛ぶ？

- ① 島に戻り、遠く北方の山へ降り立つ。
- ② 元の大陸に戻るため、西へ向かう。
- ③ 外海を更に東へと飛ぶ。



野外

飛行という壮大な体験をした諸君は、覚悟を決めて荒廃した島を後に、風に乗って更に高く舞い、外洋を東へ東へと進んだ。

期待どおり素晴らしく興奮する旅だった。だがそれも羽毛が抜け始め、だだっ広い海に急降下するまでのこと。

最悪な着水だったが、海面を漂う時間が長くなると、さらに酷さは増してくる。太陽は傾き、水平線には暗雲があった。自暴自棄になりかけたころ、幸運なことに、よれよれの帆のボートが近づいてきた。最後の力をふりしぼり、声を張り上げて腕を振った。しばしの後、何とかそのボートに引き上げられた。一時しのぎの救命ボートに過ぎず、甲板はぐらついていた。だがそこで目にしたのは、まぎれもない片耳パーティその人であった。

選択 A： 剣を向ける。ドレイルの復讐は果たさなければならぬ。

選択 B： 一時休戦する。その知識なしで嵐を乗り越えられそうにはない。

M5

選択肢: パーティと一時休戦する

目的: 12ラウンド、ドレイルとパーティを守りきる

序幕:

「こりゃまた、懐かしい光景じゃねえか？」パーティは諸君を見下ろして言った。「イカれた傭兵どもが、俺の船に突っ込んでやりたい放題したあげく、置き去りにしやがって。こっちは破片から必死に、ありあわせのボートを作らなきゃならなかった。で、今度はいきなり海のご真ん中に現れて、救助を求めてたって寸法か？」

「しかもまだ、裏切り者のクワトリルと一緒にいるとはな！」そう言ってドレイルをオールで小突いた。「この世界のどこに、こいつが生きていられる余地があるっていうんだ？」

「この人殺しの、ろくでなし野郎！」ドレイルは、咳きこみながら海水を吐き出した。「アンタが死ぬのを見届けないうちは、私は死んでも死にきれないんだわさ」

「人殺しだど！」パーティは激昂した。「なに言ってやがる、お嬢ちゃん。間違ったら訂正してほしいもんだが、お前の命を救ってやったのは俺じゃなかったか？もういっぺん海に蹴り飛ばして欲しいのか？」

ドレイルも何かしら怒鳴り返し、口論から流血沙汰に発展しそうだったので、諸君は割って入った。水平線を指さし、嵐が迫っていることを皆に思い出させた。意見の相違をどうこうするにも、まずは生き残ってからだ。

「あいよ」パーティがそう答えると、ドレイルも静かに頷いた。「ありがとな、傭兵さん。このありあわせのボートは、かつての俺の船の成れの果てだ。船員なんか、もういねえ。まあ、操舵ならまかせてくれ。

だが手助けが必要だ。ひしひしと感じるんだ。こいつは怒れる海の精の仕業だ」

「これで終わりってわけじゃないわさ、片耳！」ドレイルは荒天の轟音を上回る声で叫んだ。「この嵐が過ぎるまで、アタシに近寄らないで！」

特別ルール:

ドレイル **(a)** もパーティ **(b)** もパーティの仲間であり、全モンスターの敵です。けれどドレイルとパーティは、互いに敵同士です。ドレイルは毎ラウンド行動順位51で「移動4、攻撃3」を実行します（モンスターの攻撃修正の山を使用）。パーティは何も行動しませんが、敵の狙いの際には行動順位01と見なします。ドレイルもパーティも、HPは6+2×Lであり、どちらかが死亡したら、シナリオは失敗となります。ドレイルかパーティがダメージを受けるとき、誰かひとりが手札を1枚廃棄して、そのダメージをなかったことにすることができます。

毎ラウンド開始時、通常どおりに各プレイヤーはカードの選択を行い、その後3種類すべてのモンスターの能力カードを公開します（マップ上にその種類のモンスターがいなくても）。その行動順位の値により、どのモンスターが発生するのかが決定されます。2人ゲームなら、奇数ラウンド開始時には行動順位が最大のモンスターが発生し、偶数ラウンド開始時には行動順位が最少のモンスターが発生します。3人なら、第1ラウンドでは行動順位最大、第2ラウンドでは行動順位最大と最小の両方、第3

ラウンドでは行動順位最小、第4ラウンドでは行動順位最大と最小の両方が発生し、第5ラウンド以降はこれを繰り返します。4人なら、毎ラウンド行動順位最大と最小の両方のモンスターが発生します。発生するのは、第1から第6ラウンドまでは全て通常モンスター、第7から第12ラウンドまでは全て上級モンスターとなります。陰風の魔神は **(c)** から、潜むものは **(i)** から、氷雪の魔神は **(p)** から常に発生します。陰風の魔神が発生したラウンドでは、全キャラクターとその仲間の移動力が1増加します。氷雪の魔神が発生したラウンドでは、



全キャラクターとその仲間の移動力が1減少します。潜むものが発生した時には、全キャラクターとパーティ以外の仲間は、潜むものから1ヘクス（即座に）押し出されます。

終幕:

嵐が過ぎ、怒れる怪物の残党を海に叩き落とすが早いか、ドレイルとパーティは既に互いの喉元を狙っていた。ドレイルはパーティに向かって、電気杖を振り回す。

「やい片耳！ 今こそここで、ルース殺しの罪を償わせてやるんだわサ」ドレイルが宣言した。

「おいおい、待てよ」パーティはあざ笑った。「お前さんの友達は、長いあいだ俺たちから盗みを働き続けていたんだぜ。みんな知ってたことさ。ああでもしなきゃ示しがつかねえ。単純なことだろ」

「だからって殺すだなんて、冷酷にも程があるんだわサ」ドレイルが言った。「ルースに慈悲を与えなかったアンタに、なんでアタンが慈悲を与える必要がある？」振り上げられたドレイルの杖を、パーティはするりとかわす。

「いい加減そのおもちゃを下ろしな。怪我でもしたら大変だぜ、お嬢ちゃん」パーティは叱るような口調だ。「この件に関して、お前さんが騙して連れてきた傭兵どもが、まだそっち側についてくれると思ってるのか？ 陸に戻るには俺の操舵技術が必要だって、みんなわかってるぜ」

「だから何なのサ、このクズ野郎！」ドレイルが叫んだ。「アンタの最期さえ見届けられるなら、後はどうなろうと知ったこっちゃないんだわサ！」

「なあ、きょうだい」ドレイルの次撃を避けながら、パーティは諸君に懇願する。「何が問題か、もうわかっただろ。このイカれたクワトリルと俺は、共に同じ船には乗ってられない。あの愚行に圧倒されちまう。さあ、選択の刻だ」

報酬:

アイテム078番〈疾風の剣〉

各人 10XPずつ